

大槻裕一／咲くやこの花インタビューvol.43

大槻裕一(おおつき・ゆういち)【令和5年度 演劇・舞踊部門〔能楽〕】



人間国宝・大槻文蔵の継承者として活躍 バイタリティーあふれる期待の若手能楽師

2013 年に関西を代表する能楽師・大槻文蔵氏の芸養子となり、持ち前のセンスと熱心さで次代を担うシテ方のひとりとして活躍する大槻裕一さん。受賞理由の一つとして高く評価された 2022 年の「能 狂言『鬼滅の刃』竈門炭治郎役は、多くの話題を呼び、能に接点のなかった若い世代を能楽堂へと誘いました。さらにさかのぼること 2014 年より「大坂城本丸薪能」を企画し、自ら出演。持ち前のバイタリティーと企画力で、能の継承と拡散に努めています。

取材・文／岩本和子

中学 3 年生で大槻文蔵の後継者に

「咲くやこの花賞」受賞、おめでとうございます。

ありがとうございます。

まずは受賞されてのご感想を教えてください。

もちろん嬉しかったです。この賞は子どものころから知っていました。能狂言だけではなく、古典芸能の方が皆さんお取りになっていて、特に去年は親しくしている上村吉太郎君が受賞して。その後に続けたことも嬉しかったですね。また、僕は何か賞を受賞することも初めてでした。

お父様も能楽師であられますが、裕一さんは 2013 年に 16 歳で大槻文藏先生の芸養子になられました。

私の父が大槻文藏先生のお父様である大槻秀夫先生の最後の弟子で、秀夫先生がお亡くなりになった後は、文藏先生と父たちとで今の大槻能楽堂を作ってきました。文藏先生も父のことを信頼しているということで、中学 3 年生の時に後継者のご指名をいただきました。



プレッシャーは感じられませんでしたか？

今ならものすごいプレッシャーだと思うのですが、当時は将来のことも分からないし、なるようになるみたいな感じで思っていました。取材では「プレッシャーがすごくて…」とか言っていましたけど(笑)、そんなに感じませんでしたね。ただ、この先、どれぐらいのことをやらなければいけないのか、覚えなければいけないのかなど、膨大なことが待ち受けていることは分かっていたので、いろんなことを考えた上で、ありがたいし、断ることではないなと思って、自分にできることであればという感じでお受けしました。

文藏先生の芸養子になられてからの日々はいかがですか？

16 歳で芸養子になって、20 歳になるまでの 4 年間がめちゃくちゃきつかったですね。文藏先生の跡取りになって、皆さんに可愛がってもらったのですが、その年でツレという文藏先生の相手役をするようになって、舞台数もすごく増えました。なのでもう、追いつくことに必死でしたし、お稽古の数も多くなりました。また、高 1 の春には文藏先生の親友であった大鼓の亀井忠雄先生(人間国宝)のもとに月に 1 回、東京まで稽古に行くようになりました。鼓は大倉源次郎先生(人間国宝)にもお稽古してもらいましたが、特に忠雄先生のお稽古はすごくて…。

どうすごかったのですか？

忠雄先生には、大鼓のほかに謡の稽古を見ていただいていたのですが、40 分から 1 時間くらいある曲を最初から最後まで暗記して、間違えたら最初からやり直しという稽古を繰り返していました。なので、間違わずに 1 曲謡いきるまで 4、5 時間、ずっと稽古をするときもありましたね。あと一歩というところで間違えても、全然、お許しはもらえない。一切の妥協がありませんでした。でも、そんなお稽古でメンタルを鍛えてもらったように思います。そうやってお稽古してもらったことは、一生の自信につながりますよね。忠雄先生に稽古してもらえたことは、僕にとって宝物です。



文藏先生はどんな方ですか？

お稽古の面でいうと、厳しいタイプではないと思います。先生もお能が大好きなので、好きな者同士でお話ししているようなお稽古という感じです。なぜこういう動きになっているのか、ちゃんとその理由などを教えてくださって、「なるほど！」と改めて能の面白さ、奥深さを実感しています。先生と二人で稽古をするのですが、たとえば「檜垣」では地謡とお囃子を僕一人で全部やります。これが一番勉強に

なるし、一番楽しいですね。文藏先生の「檜垣」を僕一人で作る、みたいな。実際に僕が「檜垣」をやるとなると、おそらく50年後ぐらいでしょうし、もしかしたら、やらないかもしれない。それでも、このお稽古がとても有意義で、楽しい時間だということを分らせてくださるところも素敵だなと思います。

「野村萬斎さんが創作の楽しさを教えてくださった」

2022年に「能狂言『鬼滅の刃』」で竈門炭治郎役を演じられました。こちらはどのような経緯で実現したのでしょうか？

10代の頃から野村萬斎さんが企画される作品に何度か出演させていただいて1から企画し、創作していくことの難しさと楽しさ両方を近くで学ばせて頂きました。『鬼滅の刃』はちょうどコロナ前後にたまたま原作を読んで能狂言との親和性を感じました。能は弱者や敗者にスポットを当てた物語が多いのですが、『鬼滅の刃』も時に弱者に寄り添うようにスポットを当てている。そこを丁寧に表現することができれば沢山の人の心に愛される新たな能楽作品が生まれるのではないかと思います。文藏先生や萬斎さんと何度も話し合っって創り上げていく過程はとても勉強になりました。お客様にも喜んでいただいて、有難いことに今年の夏は大阪に新しくできた劇場、SkyシアターMBSで再演させていただきます。



舞台に対する心構えなども、師匠方の教えが反映されていますか？

亀井忠雄先生には、「1回の舞台を、死ぬぐらいの気持ちでやった方がいい」と言われてきました。先日、「道成寺」をやらせてもらいましたが、もう二度とできないかもしれないという気持ちで挑みました。人生もそんな感じで、なるべく悔いが残らないように行動しています。

能は敷居が高いからこそ非日常を楽しめる

昨年、「咲くやこの花賞」を受賞された上村吉太郎さんとも親交があるとのことですが、どんなお付き合いをされているのでしょうか？

吉太郎君とはもう8年くらいのお付き合いになります。初めは(吉太郎の師匠の)上村吉弥さんとお仕事で一緒する機会があって、その時に吉弥さんから吉太郎くんを紹介してもらいました。大阪松竹座の楽屋で初めて会って、連絡先を交換して以降は、お互いの舞台を見に行ったり、食事にも行くようになりました。最近では、2022年に南座で上演された舞台『波濤を越えて』で吉太郎くんと初共演しました。「いずれ一緒に舞台に出られたらいいね」という話をしていたのですが、なかなか歌舞伎役者と能楽師が同じ舞台に出る機会がなくて。でも、『波濤を越えて』で意外とすぐに共演できました。



同世代の演者の方の存在は、どんな刺激になっていますか？

最近で言うと、コロナ禍で公演がストップした時、それこそ中村壺太郎さんや尾上右近さん、吉太郎くんとかと、これからどういうふうにしていこうとか、どういうことならできかなとか、オンラインで話し合いました。どうしたら皆さんに能や歌舞伎を楽しんでもらえるのかすごく考えて、しょっちゅう電話でもお話していました。その後、公演ができるようになってからも色々とコラボさせてもらって。壺太郎さんとも『波濤を越えて』で一緒しましたね。「能 狂言『鬼滅の刃』」で、同世代の野村裕基さんや野村太一郎さんと一緒にできたことも嬉しかったです。お二人とも以前から仲良くさせて頂いていましたが、がっつり舞台の上で一緒するのは初めてで、お稽古の時からとても刺激を頂いていました。

同世代の方に能を伝えていくことも裕一さんのお役目のひとつだと思うのですが、能の魅力や面白さを若い世代に伝えるとしたら、どう表現しますか。

そこも一番難しいとっていて。ただ、「能 狂言『鬼滅の刃』」で能楽ファンの方が微量ではありますが、増えたと思います。大槻能楽堂のファンクラブでも「能 狂言『鬼滅の刃』」を見て、能が好きになりましたと書いてくださる方もいました。「能 狂言『鬼滅の刃』」は新作ですけども、「能狂言を観た。次は古典を観に行きたいな」と思って、また能楽堂に行くという、そのきっかけになったのはすごくよかったと思います。

一方で、今回の「能 狂言『鬼滅の刃』」で一番大事にしたのが、敷居を落とさないことでした。能は「もっと敷居の高さを低くすべきだ」と耳にすることがあります。そういう考え方もあるかもしれませんが、僕の考えは、高級なフランス料理を食べに行くとき、その贅沢な空間そのものも含めてお金を払いますよね。能楽や歌舞伎も、日頃味わえない緊張感を体感できることが魅力の一つだと思っています。決して安くはないチケット代と大切な時間を頂いています。せっかくだからお洒落を楽しんで、非日常な空間に行って、生の舞台を存分に味わっていただきたい。ネットフリックスなどお家で気軽にエンタメを楽しめる時代だからこそ、この「敷居の高さ」は我々の一つの武器だと捉えて、お客様に楽しんでもらえたらと思っています。



裕一さんの同世代の方にとっては、ちょっと背伸びする感覚ですか？

そうですね。僕も最近、野村裕基さんと新国立劇場で「くるみ割り人形」を観に行きました。それこそちょっと背伸びして、緊張感を持ちつつも豊かな時間を過ごせました。同世代の方々にとって能楽もそう思ってもらえたら嬉しいですね。

ちなみに、お能のお客様にも東西の差はあるのでしょうか？

ありますね。東京の方が会場の雰囲気緊張感があります。終わった後も、舞台上から演者が一人もいなくなったら拍手されてお帰りになるという。大阪は、始まったら「誰か出てきたで！」と客席から声が聞こえたりして、終わったら演者一人一人に拍手されます。それはお客様の「良かったよ！」という気持ちの表れだと思うので、嬉しいのですが、まだお囃子方が舞台上にいても帰る人もいたりして、もう自由ですね(笑)。そこが面白いと思うのですが、僕は東京も大阪もそれぞれに好きです。



では最後のご質問です。裕一さんが大阪市に「咲くやこの花賞」を差し上げるとしたら、何に贈りますか？

大阪城ですね。大阪城が一番好きです。僕は大阪城のふもとで生まれて、大阪城の目の前の小学校に通って、授業中も、給食の時間も、ずっと大阪城が教室からみえていました。大槻能楽堂も大阪城の近くにありすし、なんといっても能をこよなく愛していた太閤さんのお膝元でもありますからね。

地方から帰ったときなど、大阪城を見たらほっとしますか？

ほっとしますね。特に夜はライトアップされてきれいですよね。ちなみに、「大阪城本丸薪能」の時は、乳がんピンクリボンのピンクとか、大腸がん啓発活動のブルーリボンとか、白血病啓発活動のオレンジリボンとか、病気の方への支援で 3 日間、ライトアップの色を変えて舞台をライトアップしてもらっています。大阪城の一番好きなアングルは、京都から帰ってくるときに、阪神高速を森ノ宮で降りる手前の景色が好きですね。ちょっと遠くに大阪城が見えた時、大阪に帰ってきたなあ実感します。

